

高麗寺院の宿泊機能と新羅

—新羅の交通体系研究の一環として—

滋賀県立大学人間文化学部教授 田 中 俊 明

【司会】 はじめに仏教文化研究所長の能任先生からご挨拶をいただきます。

【能任】 本日、仏教文化講演会にたくさんご参加くださりましてありがとうございます。本年、二度目の講演会でございます。回を重ねまして83回目となります。今回は歴史学科東洋史学専攻科がご担当くださいました。滋賀県立大学人間文化学部教授の田中俊明先生をお迎えしてご講演をいただくことになりました。先生は朝鮮、古代史研究において大変ご高名な先生であります。表題は「高麗寺院の宿泊機能と新羅」と上げられています。朝鮮半島の歴史の中で仏教寺院が果たした役割には大きなものがあつたのではなからうかと思っております。本日のご講演で、みなさま方の仏教文化への知見が広められますれば大変ありがたいことでございます。簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

【司会】 本日のご講師であります田中俊明先生のご紹介を東洋史学の都築晶子先生よりお願いいたします。

【都築】 私の方から田中俊明先生についてご紹介させていただきます。田中先生は京都大学大学院博士課程を終えられた後、大阪の大学を経て

現在の滋賀県立大学人間文化学部にお勤めです。本学の文学部でも先生にお願いして古代朝鮮史を教えていただいています。先生の授業を受けている方もおられるかもしれませんが。田中先生は古代朝鮮史の第一人者であり、多くのご著書を執筆されています。特に古代朝鮮半島の東側の沿岸部に位置していた加耶という地域がありますが、古代日本とは深い関係があり、当時、倭の国では任那と呼ばれていたわけです。古代朝鮮と古代日本の交流を見ていく上で重要な地域になります。ここについて画期的な仕事をされています。『大加耶連盟の興亡と「任那」という著書』を吉川弘文館から一九九二年出版されています。また朝鮮史だけでなく、日本史の方にも、最近では学生にもわかりやすい形で書かれています。『古代の日本と加耶』、日本史リブレットのシリーズから出版されていますので、機会があれば、ぜひ手にとってみていただきたいと思います。

先生のご専門は朝鮮史ですが、先生のご研究は非常に広い範囲で、日本、中国も含めて東アジア全体に及ぶものです。私にとっても刺激的で、時々、先生の本を拝見させていただいてはいましたが、もう一つは古代日本、古代朝鮮は文献資料が少ないんです。ほとんど残っていない。中国においても朝鮮半島についての記述は余り多くありません。先生は少ない文献資料を丹念に分析しておられ、なおかつ最近、考古学的な出土品がたくさん出ております。考古学的な調査が韓国、高句麗の領域であった中国の遼寧省、日本でもいろんな遺跡が出てきています。遺跡の現地調査を踏まえ、石刻資料、石碑の碑文を利用して広い視野に立ちながら精緻な研究をされておられて、常々学びたいと思っています。次第です。本日はそうした先生のご研究の一旦も伺えると思います。「高麗寺院の宿泊機能と新羅」、交通路の問題も含めてお話いただけたと思います。それではよろしくお願いたします。

【田中】 こんにちは。田中でございます。「高麗寺院の宿泊機能と新羅」というタイトルでお話をさせていただきますが、実は科学研究費の分担者として二つかわわっているものがありまして、一つは「古代中世東アジアの関所交通政策」というテーマ。もう一つは「古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究」。どちらも基盤研究Aで、今日、お話するテーマはその両方にかかわる、一粒で二度おいしいものを選んで研究を進めようということです。仏教史は専門ではないのですが、たまたまそのようなかたちで研究を進めようとしているときに依頼を受けましたので、その中間報告ということでお聞きいただければと思います（当日は、パワーポイントも使い、史料や図面・写真をみていただきな

がら説明をしましたが、紙幅の関係もあつてごく一部しか載せることができません。

寺院の宿泊機能ということで、よく知られているのが、円仁の「入唐求法巡礼行記」に出てくる「普通院」というものです。

唐における寺院の宿泊機能については、つとに道端良秀「宿房としての唐代寺院」(『支那仏教史学』二巻一号、一九三八年)および那波利貞「簡易宿泊処としての唐代寺院の対俗開放」(『龍谷史壇』三三三号、一九四九年)が発表されており、その存在は広く知られるところです。そこに当然、「普通院」もとりあげられております。

例えば「入唐求法巡礼行記」巻二・開成五年(八四〇)四月条に、

廿三日早朝、粥を喫う。西北に向かい行くこと廿五里、黄山八會寺に到りて斷中せり。茶飯を喫う。時人之を稱して上房普通院と為す。長しく飯粥有り、僧俗を論ぜず、來たり集まり便ち僧宿す。飯有れば即ち與え、飯無ければ與えず。僧俗の赴きて宿るを妨げず。故に普通院と曰う。院中に兩僧有り、一人は心開き、一人は心鬱(しず)む。一黃毛の狗有り。俗を見れば嘔りて咬み、杖もて打たるを憚らず。僧人を見れば、主客を論ぜず、尾を振りて猥りに馴れる。齋の後ち、西北に向かいて山に入り谷を尋ねて行く。時人之を喚びて國信山と為す。上房従り行くこと廿里を得、劉使普通院に到りて宿る。便ち五臺山金閣寺の僧義深等の深州に往き油を求めて歸山するに遇えり。五十頭の驢に油麻油を駄して去く。又た天台の國清寺従り僧巨堅等四人、五臺に向かうを見る。語して云う、「天台國清寺に日本國僧一人、弟子沙彌一人、行者一人。今見に彼の中に在りて住せり云云」。

とあります。ここに上房普通院・劉使普通院がみえ、円仁は前者で昼食、後者で宿泊しています。特に前者については、僧俗を論じないで宿泊できる実態を伝えています。

普通院は、これが初出ですが、前日に鎮州行唐県に泊まり(城内の西禅院)、次の日、ここに見られるように西北に二五里の黄山八會寺で断中(昼食)しています、その八會寺が上房普通院とよばれていたのです。そこから二〇里で、劉使普通院に着いています。そこはもう五台山のすぐ東といつてよく、五台山の周囲には普通院が多かつたようです。

五月二日に五台山の竹林寺に着いて一六日まで滞在、さらに大華嚴寺に移動し、七月一日に長安に向けて出発するまではそこに滞在したのですが、そのあと一三日に太原に到着するまで、また何日か、通過地にある普通院に泊まっています。

そのように、普通院は、宿泊できる寺院といってよいものです。これらを中心にして、唐代の寺院の宿坊としての寺院の機能について論文が書かれているわけです。

円仁は、最後となつたいわゆる承和の遣唐使の一員として唐へ渡り、結局、天台山にはいけずに五台山にいくわけですが、その過程で山東半島に赤山法華院という新羅の張保臯がつくった寺院がありまして、そこに九カ月くらい滞在しております。先にあげた記事は、そこから出たあとのことになります。

わたしは、赤山法華院自体が、そうした宿泊機能をもっていたと受け取ってもいいと思います。もちろん新羅人との関係から、長期滞在が可能であったという側面はあるでしょうが、そもそも寺院に宿泊機能があるため、異質な感もなかったのではないかと思うのです。現在の赤山法華院は、一大観光地と化して、当時の伽藍よりも巨大な寺院になっています。現在の赤山法華院は、当時の正確な位置は確認されていません（中国山東省赤山法華院 — 1989年調査報告書「赤山法華院研究会、一九八九年」）。

赤山法華院を出たあと、三月二四日から青州で新羅院に宿泊しています。また四月六日に、長山県に近い醴泉寺の新羅院に泊まっています。このような新羅院は、新羅人のために造られた宿泊施設というより、新羅人の寄進によって造られたものではないかと考えられます。もちろん新羅人が主に宿泊することを見越してということではできません。赤山法華院についても、円仁は新羅院と記すことがあります。こうした点においては、新羅人が寺院の宿泊機能と直接関わっているということもできるでしょう。

そこで、同じ時代の新羅にもそういうものがあつたはずだろうと考えて調べたいと思つたわけです。というのも新羅の後の時代が高麗ですが、高麗時代には明確にお寺に宿泊機能があつたということがわかっています。そこで、唐と同じ時代で、高麗に先行する新羅

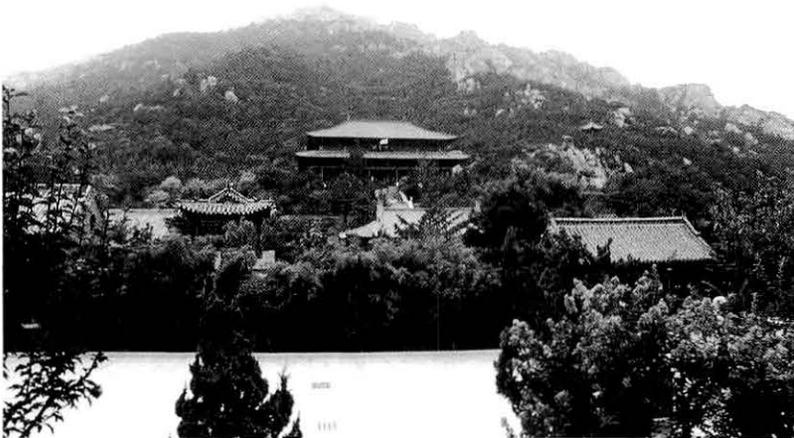


図1 赤山法華院（山東省文登市）現状全景

に寺院の宿泊機能があったことは十分に考えられるという前提のもとに調べようと思ったわけです。しかし実はそんなにうまく見つかりません。今日の話は高麗寺院の宿泊機能については少しふれますが、新羅については、その交通体系がどうであったかを中心にお話することになります。わたしの研究課題のひとつは新羅の交通体系であり、新羅の道路交通網がどうなっているかなどについてお話をし、寺院の宿泊機能に関わる資料はそれほど残されていない、という状況についてお話をしようと思います。

高麗時代寺院の宿泊機能ですが、まず弘慶寺碑文をとりあげます（一〇二六年建立）。碑には「奉先弘慶寺碣記」と題されていますが、通常『弘慶寺碑碣』と呼んでいます。忠清南道に天安市があり、天安の南に成歆という町があります。そこに寺址があります。奉先弘慶寺址は、現在の大きな道路のすぐ横にあり、二〇〇八年と二〇〇九年に試掘調査されたことがあります（『天安奉先弘慶寺試掘調査報告書』忠清南道歴史文化研究院、二〇一一年）。正式な発掘はまだです。碑は現地にいまも建っています（図2）。周りは何もない状況です。石質の関係か、文字ははつきりとして読みやすいものです。その中に稷山県の成歆駅の北路に新たに寺をつくることについて記しています。『今、稷山縣成歆驛の北路の一牛鳴地に於て、新たに寺舎を置くは、即ち其の類也。初め是の地に長短之亭無し。人煙隔絶し、勸蒲之澤有り、劫賊頗る多し。岐路之要衝なると雖も實に往來之艱梗、終否す可からず』。そして、寺の西側に八〇間の客館を立てるとあります（『又た寺西に對して客館一區を立つ。計八十間。号して廣縁通化院と曰う』）。

この寺は高麗の八代目の王である顯宗が父親の冥福を祈ることを合わせて立てた、願堂寺院とされるものの一つですが、その寺に宿泊所をつ



図2 『奉先弘慶寺碑碣』

くるということを書いてあるわけです。ただ碑文に書いてあるのですが、現実の建物はわかっていないものですから、状況はそれ以上は追及できません。今後の正式発掘を待たなければなりません。

「稷山県の成歎駅」、現在の地名も成歎ですが、駅伝の制度、駅を点々と配置して中央の命令を伝達する駅伝制は日本にも中国にもありました。そして高麗にもありました。高麗の都は開城、現在北朝鮮ですが、そこから全国に駅路が開かれていました。主要通路に一定の間隔をおいて駅を置き、王の命令を伝達する時に馬を乗り継いで地方に伝えます。その中の一つの駅が成歎駅という駅で、「高麗史」巻八二・志三六・兵二・站驛の「忠清州道」とされる三四駅のひとつです。その成歎駅近くに宿所をつくったのです。このあたりは宿泊施設がなくて、人里離れたところにあり、盗賊も多い。要衝のところまで往來の困難があることをそのまましておくわけにいかないと王が思つて宿泊施設をつくるのであると書いています。明らかに寺院にそういう意図でもつて宿泊施設をつくっているわけです。しかも僧侶に限らず、僧俗あわせて泊めるための施設をつくっていることが確認できます。

碑文には「辛酉」年に伽藍が造営されたことを記しています。辛酉年は顯宗の十二年（一〇二二）です。試掘では「弘慶寺」という寺の名が入った文字瓦が出土しています。年号が入っているものもあり、一〇一七年の年代を記していて、造営時期に合います。

【大東輿地図】に天安・稷山がみえます。この地図が作られたのは一八六〇年頃で、それほど古くはないのですが、歴史地図としての機能もありまして、当時の地図だけではなく、古い要素を加えこんでいます。稷山と天安の間が線で結ばれていますが、それは道路を示したものです。そのように直線の道路ということではなく、定点間を結ぶ道路があるという意味にすぎませんが、この道路にそったところに弘慶寺が位置していることとなります。

高麗時代にはこのように明らかに宿泊機能をもつお寺がありました。それに関連して別のお寺を見ますと、忠州市の中原弥勒里寺址をあげることができます。弥勒里というのは地名で正式の名前は弥勒大院です。「三国遺事」王曆・第八阿達羅尼叱今条に「弥勒大院」と記されており、寺址からは「明昌三年（一一九二）、金堂改蓋……大院寺住持大師……」や「弥勒堂草」と書かれた文字瓦が出土しております。「高麗史」には「忠州大院寺」とみえています（巻一一九・崔忠献伝など）。これらから、弥勒大院とか大院寺・弥勒堂とよばれていたことが確認できます。大きな弥勒仏を窟室のように囲んだ本殿のあるやや変わった伽藍ですが、隣に宿泊施設であると考えられるものがあります。厳密に言うと、寺は

大院寺で、宿泊施設が弥勒大院ということでしょう。ただしそうであれば、先に大院があつて、そのあとに寺が造られ、さらにその寺との関係で弥勒大院という名になったと考えるべきでしょうか。すぐ前の道路から峠を抜けていくことができ、新羅時代の幹線道路でした。新羅の中心地（王都）は朝鮮半島の東南の端にあるのですが、現在のソウル地方に行こうとすれば、小白山脈を越えていく必要があります。その山脈を超える峠のうち一つが雞立嶺と呼ばれていました。『三国史記』卷二・新羅本紀第二・阿達羅尼師今三年（一五六）条に「雞立嶺路を開く」とある峠ですが、そのとおり一五六年、紀元後二世紀に開かれたということにはなりません。年代には疑問があるのですが、古くから使われていた峠とみていいでしょう。同王の五年（一五八）条に「春三月、竹嶺を開く」とありますが、その竹嶺も新羅が古くから使っている峠です。これは東西に並ぶ峠です。雞立嶺にあたるのは、現在はハヌルジェと呼んでいます。ハヌルは天、ジェは峠です。車は通ることはできませんが、いまでも峠として使われています。新羅王都方面からすれば、峠を越えて降りたところにあるのがこのお寺です。街道に面する形で、大院の施設がつくられていたことになりました。ここは一九七七年から四次にわたって主に清州大学の博物館が発掘調査をしておりまして、『中原弥勒里寺址五次発掘調査報告書 大院寺址・弥勒大院址』清州大学校、一九九三年ほか。三次調査は梨花大学校博物館による）、建物の配置がわかっております（図3）。日本の駅家と同じような「ロ」の字型で全体を囲むような構造になっていて、馬小屋と宿舎が配置されていたものと考えられます。オンドル遺構も確認されています。また前の道をハヌルジェまで登ると、遮断している城壁が残っています。時代はよくわかりませんが、関門のような形でつくられていて、石積みが何百mか残っています。竹嶺にも同じように上に遮断の城壁がつくられていますが、そこには軍事施設があつて立ち入りできません。

もうひとつあげますと、惠陰院があります。ソウルより北の京畿道坡州市にある宿泊機能をもっているお寺です。ここは、金富弼の「惠陰寺新創記」（『東文選』卷六四）に、高麗の睿宗代に交通の要所であるにも関わらず、人里離れ、虎狼や寇賊が現れ、行く者が困苦しているという報告を聞いて、王が廃寺に宿泊施設を持った寺を新たに創った、とあるところで、一一二二年に完成したとあります。これも発掘がなされています（『坡州惠陰院址発掘調査報告書』檀国大学校埋蔵文化財研究所・坡州市、二〇〇六年）。四〇〇〇坪も発掘されたのですが、まだ全体の半分程度で、のちに行宮が造営されたという記録があり、発掘地域の大半（東部）は、その行宮址のようです。そしてその西側も、行宮に付属する建物ではないかとみえています。未発掘の残る範囲に、院と寺があつたことになりましたが、その全貌はまだわからないということです。わた

しは、発掘が終わってからです。現地を訪れたことがあります。街道と考えられる現在の大きな道から山の中に入り込んだところに位置しています。印象としては、やや不便な感じを受けました。当時の道路がどうか確認したわけではありませんが、すぐ横を通っているということではなさそうです。先の弘慶寺や弥勒大院とは違って、少し引っ込んだところにつくられているのだと思います。

なお、宿泊機能についての記録が残されているわけではありませんが、現在も発掘が続いている法泉寺という大きな寺が江原道原州市の西の郊外にあります。新羅時代の遺構は道路の下にあって、塔の部材が残っていて双塔式の伽藍です。現在までに発掘されたのは、高麗時代の遺構です（『原州法泉寺Ⅰ 第Ⅰ区域発掘調査報告書』江原文化財研究所・原州市、二〇〇九年、『原州法泉寺Ⅱ Ⅲ区域発掘調査報告書』江原考古文化研究院・原州市、二〇一四年）。そこには、塀で区画されたところが

あり、形態的に院という言い方をします。宿泊機能のあるなしに関係なく独立した区画を院と呼ぶのです。しかし宿泊機能をもった部分であることも十分考えられます。今年八月に行った時に発掘担当者とそのように考えられるかどうか、話をしました。今後の課題であるということです。伽藍全体の把握もなお今後の調査にかかっているので、そうした点も明らかになってくるかも知れません。

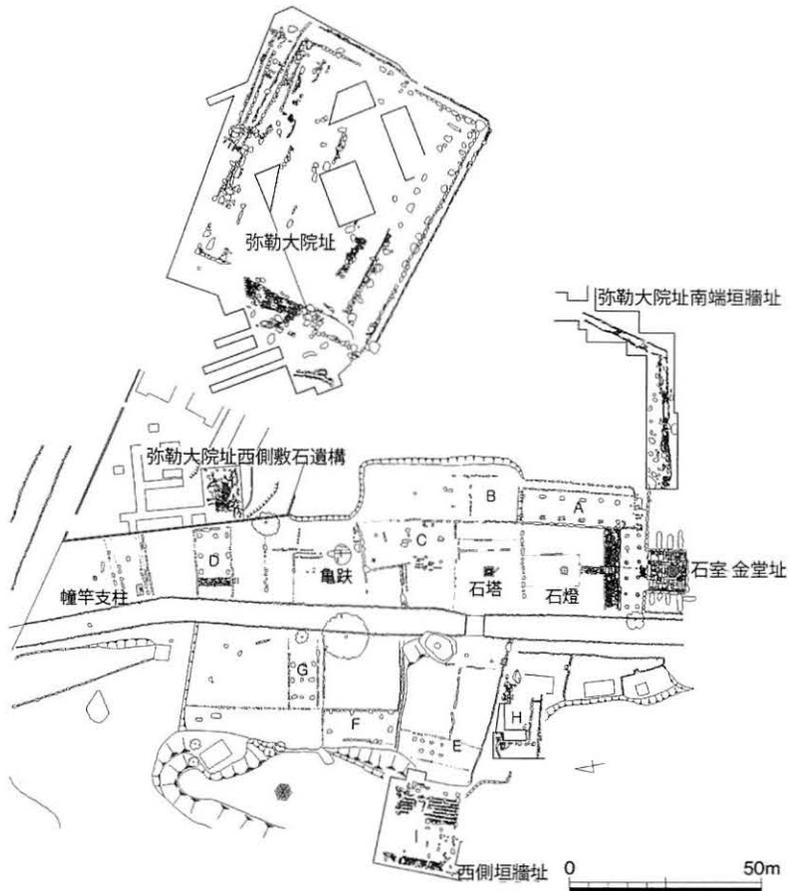


図3 弥勒里寺址発掘平面図

ついでに、これらの西側にある鳥嶺についてふれておきますと、新羅時代には雞立嶺・竹嶺がメインの通路だったわけですが、高麗時代以降は鳥嶺がメインになります。都の開城、朝鮮王朝になるとソウル（漢陽）が都になりますが、そこと慶尚道すなわち嶺南地方と呼んでいますが、両者を結ぶ主要幹線がここを通っていたわけです。ここにも遮断する城壁を造っています。北から行けば、峠を越えて順に第三、第二、第一と、三つの関門があります。その第一関門と第二関門との間に鳥嶺院と呼ぶ施設が造られています。城壁のような石積みの垣牆で囲まれた中に建物がありました。遺構は錯綜していますが、現在は入り口から中に入ってみることができるようになっています。また外はすぐ前をその峠道が通っています。中にみずばらしい建物が建てられています。発掘の成果のままではありません。ここは、寺というわけではなく、国家的に使っている院、役人が往来する時に宿泊することがメインの施設といえます。駅院とまとめていうことがありますが、唐では、ことばの意味として、規模の大きい場合に駅、小さいものを院といったことです。公的施設にも院があり、それが宿泊施設にもなっていたのです。

このような高麗時代の状況を見ていただいて、新羅ではどうかを考えたと思います。さきほど申し上げましたように、直接に宿泊機能をもつ寺院の記録がのこっているわけではありません。そこです。そもそも新羅の交通政策がどうかについてみていきたいと思えます。新羅にも、高麗時代や朝鮮時代と同様に、交通路を管理するシステムなり、駅をつないで連係させるということが記録にはつきりと残っています。鳥嶺には古道博物館もつくられていて、そうした資料が集められてもいます。また今年七月、釜山博物館で「嶺南大路」という特別展示が開かれていました。わたしも、それを見るためだけに、釜山へ行きました。嶺南大路は朝鮮時代の王都漢陽と慶尚道をつなぐ一番のルートです。小白山脈を越えてから南側、慶尚道が嶺南とよばれ、その嶺南に向かう大路が最大の幹線道路であったわけですから。その上に鳥嶺がある。新羅にも、高麗時代や朝鮮時代と同様にそうした駅路があり、駅が置かれて駅伝制が施行されていたことを知ることができます。ただし、細部に渡ってシステムがわかるというほどではありません。

まず、「三國史記」卷三・新羅本紀三・炤知麻立千九年（四八七）三月条に、
始めて四方に郵駅を置き、所司に命じて官道を修理せしむ。

とあります。これによれば、四八七年に地方に至る官道があつて、駅伝制が整備されたかのように読めるのですが、この時点で全国的に広がっ

たとは、とても考えられません。しかし新羅末までの長い時間幅で考えると、駅伝制が存在したことは確実です。新羅末の崔致遠の撰文した「雙谿寺眞鑑禪師碑」（八八七年）には、「星使往復者、交轡于路」や「每有王人、乘駅伝命」という表現がみられます。禪師を迎えに行く使者について表現したもので、唐でも知られた文才のある崔致遠の文なので、いくらか象徴的な意味であることは否めませんが、現実に駅伝制があったことを前提にしていると考えてもいいかと思えます。

ただし残念なことに、今まで街道といえるような幹線道路が発掘された例がありません。道路の調査は都慶州において、条坊を区画する道路が確認されて以来、地方の道路もあちこちで見つかっているといっている状況ですが（朴相銀「嶺南地域古代地方道路の研究」嶺南大学校碩学位論文、二〇〇六年にそれ以前の整理があります。その後も、見つかっています）、幹線道路とはいえません。地方の道路で、幅が一六mにもおよぶものもありますが多くは幅の狭い道路です。見つかっている範囲では幅は狭いですが、何十mかは直線的につながっている道路です。側溝があるものもあれば、ないものもある。都の道路の場合でも、側溝があるものと、そうではなく、V字のように真ん中が凹んだ形になっていて、そこに水を集めるものもあります。轍の跡が残っていたり、砂利敷きであるとかによって道路であることがわかりますが、幹線道路は今のところ見つからないのです。それも今後の調査に期待するしかありません。

制度の実態は伝える記録がありませんが、駅の名がいくつかわかります。まず『三国史記』卷三八・職官志上に、

京都駅。景德王、改めて都亭駅と為す。後ち故に復す。大舎二人、位、舍知より奈麻に至るまで之と為す。史二人。

とある京都駅ですが、時期によつて都亭駅ともいったようです。この京都駅（都亭駅）は、役所としてのものです。駅としての京都駅を管理する役所になります。都亭駅とは景德王代に改名したもので、のちにもとに戻ったといいますが、通例次の恵恭王代に元に戻します。新羅時代の官庁の名前は変更があつても、古いものをそのままに用いたり、そのへんは曖昧なので、都亭駅と呼ぼうと京都駅と呼ぼうと構わないのですが、都亭駅というのは、当時の中国、唐にもありました。長安と洛陽の両都にもあつたことが確認されます。

『大唐六典』卷五・尚書兵部条に、

駅毎に皆な駅長を置く。駅の閑要を量りて以て其の馬数を定む。都亭七十五疋。諸道の第一等、都亭の十五を減ず。第二第三、皆な十五を以て差と為す。第四、十二を減ず。第五、六を減ず。第六、四を減ず。

とあり、『唐会要』巻六一・館駅目に、

〔開元〕十五年（七二七）四月十日勅すらく、兩京の都亭駅、応に使人を出だすべきに、三品以上及び清要官は、駅馬到るの日に、淹留し、時を過ぎて発せざるを得ず。餘は並びに駅に就りて進発せしめよ、と。

とある通りです。そして、日本にもありました。『続日本紀』巻五・和銅四年（七一）春正月丁未（二日）条に、

始めて都亭駅、山背国相楽郡に岡田駅、綴喜郡に山本駅、河内国交野郡に楠葉駅、撰津国嶋上郡に大原駅、嶋下郡に殖村駅、伊賀国阿閉郡に新家駅を置く。

とあります。日本ではこの記事について、岡田駅以下が都亭駅の具体的な名で、都亭駅は六駅あったというみかたもありますが、このように並列に読んで、都亭駅と他の六駅とを設置したという記事としてうけとるべきでしょう。

新羅の京都駅（都亭駅）ですが、新羅の都において王宮を月城と呼んでいます。現在月城の東南側に国立慶州博物館があります。その横にかつて旧駅という村がありました。一九三〇年の地図にそれがみえております（図4）。現在は国立慶州博物館の駐車場になっているところです。この旧駅について、釜山博物館館長の朴方龍さんが、旧駅とは新羅時代の京都駅に因んだ名前が残っているんだと指摘しています（『新羅都城の交通路』『慶州史学』一六輯、一九九七年）。新羅時代の名前を受けて旧駅と言ったとすれば、かなり時間があきますが、のちの時代、高麗・朝鮮時代に駅制はあっても、このあたりに駅をつくる必然性が、あまりないものですから、その可能性は十分にあると思います。王宮のあった月城は、まだ発掘されていなくて、今後、発掘が予定されていますが、ここに王宮月城があつて、そのすぐ東に太子の宮、東宮があつて、それらを取り込んだ一つの区画が考えられます。わたしはそれが記録に残る満月城ではないかと

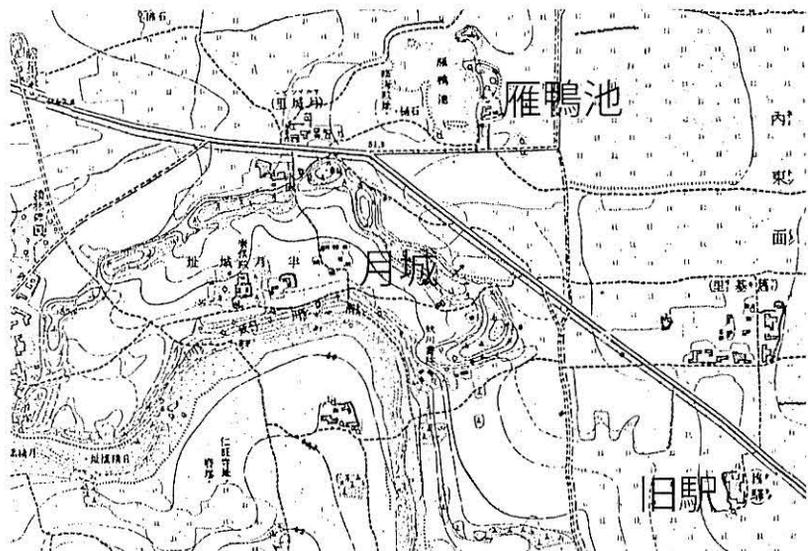


図4 慶州旧駅マウルの位置

思いますが、少なくとも、王宮区とでもよぶべき特殊な区画であったと考えられます。そして京都駅は、その区画のすぐ横に位置していることとなります。

東宮の一郭には、雁鴨池と後世に呼ばれることになる池（新羅の当時は月池）があります。そこが発掘された際に出土した木簡がありまして、李鎔賢さんがかつてその中に高城という地名が出ているものを取りあげ、王都から現在の江原道にあたる高城まで急使を派遣して伝達した牒文のひとつであると考えました（『統一新羅の伝達体系と「北海通」』『朝鮮学報』一七一輯、一九九九年）。最近、橋本繁さんが、「牒」ではなく「缶」とよむべきで、「瓶」を意味すると考え、高城に送る塩辛の壺につけた荷札であると主張しています（『韓国古代木簡の研究』吉川弘文館、二〇一四年）。いずれにしても、都から遠く離れた高城に派遣した急使が持つて行ったということになるかと思いますが、そのような時に、王宮や東宮に近いこの京都駅から出発したのであると考えることがができます。王宮月城の機能のひとつが地方を統治する中心であることと、駅の出発点になる京都駅とが空間的にもこのように密着していたことはたいへん興味深いことです。ある意味、当然なことということができます。

他に駅の名前が出てくるものとして慶尚南道の昌寧という町に仁陽寺というお寺の跡があつて、そこに石仏と碑文が背中合わせになつていて変わった石造物が建っています（図5）。その碑文は『仁陽寺塔金堂治成文』と呼ばれ、八一〇年に建てられたものですが、そこに二つの駅の名前が見えます。「羊熱楡川二駅」というように読めます。「羊」は「辛」と読む意見もあります。これは仁陽寺の塔・金堂の造営に際して、周辺の寺院などから喜捨がなされたことの記録で、「壬戌年（七八二）に仁陽寺の事妙（抄）戸・頂礼石が成る。



図5 『仁陽寺塔金堂治成文』裏面

同寺の金堂を治す。同年、羊熱・楡川二駅、食百二石を施す」と記しています。つまり二駅も「食百二石」を喜捨したという記録です。楡川駅は、『高麗史』卷三六・兵志二・站駅・金州道に登場しますが、羊熱駅は不詳です。辛熱であれば、『三国史記』の卷三二・樂志に登場し、地名とみる考えもあります。

また、忠清北道の清州市の上党山城などから出土する瓦に「長池駟」がみえています。長池駅です。全文は「沙喙部属長池駟」とあって、清州は新羅の五小京のひとつ西原京だったので、そこにも、新羅王都と同じく沙喙部をはじめとする六部があつたのではないかがわせる内容です。ただし瓦としては高麗時代の瓦のようで、長池駅も高麗時代にあつたということを示すにすぎないともいえます。実際、先の成歙駅と同じく、『高麗史』の「忠清州道」にみえています。

このように、京都駅以外にいくつかの駅が知られています。新羅の王都に京都駅以外に、もう一つあつたことがうかがえる史料があります。活里駅です。それは、『大東韻府群玉』という韻文をつくるための辞書、韻を引くために熟語の下の方から引く、逆引きの辞書で、中国にあります。それに倣ってつくられたものです。そこにはいろんな資料が集められています。

その中に、「殊異伝」というものを引用して(卷二〇・入声・十五合・塔条)、次のように記しています。

志鬼は新羅活里駅の人なり。善徳王の美麗を慕い、憂愁涕泣し、形容憔悴す。王、寺に幸して行香せんとし、聞きて之を召す。志鬼、寺塔の下に帰し、駕幸せるを待つに、忽然として睡酣す。王、臂環を脱ぎ胸に置き、宮に還る。後ち乃ち睡覺め、志鬼悶絶し、良久しくして心火出でて其の塔を繞り、即ち変じて火鬼と為る。王、術士に命じて呪詞を作らしむ。曰わく、「志鬼心中の火、身を焼き火神に変じ、滄海の外に流移し、見えず相親しまず」と。時の俗に、此の詞を門壁に帖り、以て火災を鎮む。

極めて伝承的な話ですが、志鬼という人物が新羅活里駅の駅人であると書いています。活里駅があつたことがわかり、駅人の存在もわかります。駅舎や駅馬などを管理する人が駅人です。高麗以降の例からすると駅人は賤民になります。世襲的にそういう仕事を受け継いでいる人たちです。新羅はどうだったか明確にはできません。そもそも駅人が出てくるのがこの史料しかないので。特別にそういう仕事を世襲的に任されている人たちが、一定のところに住んでいる、駅に近いところに住んでいて駅人と呼ばれている、と理解してもまちがいでないと思います。この話は駅人の志鬼という人物が善徳女王、新羅には三人の女王がいましたが、その一人です。美しい人で、志鬼がそれを慕って恋しいにかつ

て、やつれた状態になった。善徳王がある寺（靈廟寺です）に行幸した時に、そういう駅人がいることを聞いて召しだした。志鬼は喜んで寺の塔の下に早く行って待っていたところ、忽然として眠ってしまった。王がやってきた時には眠っている。王は起こすことなく、自分の身につけていた臂輪をとって志鬼の胸の上において宮殿に帰った。志鬼は王が帰ったあとに目覚め、王に会うことができなかつた。そのために悶絶し、やや久しくして心の中から火が出て寺の塔をめぐり、塔を全部焼いてしまった、というお話です。その時に王は呪術師に命じて呪文をつくらせました。志鬼の心中の火が身を焼き、火神に変じて、あとは青い海の外に流れていって、それから見え、相親しまず、と。つまり火が外に出ていくように、火災を鎮める呪文の札になったという話です。ここに出てくる新羅活里駅ですが、高麗時代にも活里という駅が出てきます。朝鮮時代になると、沙里という名前に変わったりしますが、これはもとの活里駅であることがわかります。移動があつたという記録があるんですが、省略します。新羅の都の中に活里という駅があつたことが確認できることになります。

そのほか、屈井駅という名前が出てきます（『三国遺事』卷三・靈鷲寺条。「屈井驛」）（『三国遺事』卷五・朗智乘雲普賢樹条、「屈歇驛」）（『三国遺事』卷一・奈勿王金堤上条）という表記もありますが、同じです。屈井は屈火と同じですが、その地名は現在の蔚山という大都市の心部から西にちよつと外れたところで、道路遺構が見つかったところがあります（李東注「蔚山屈火里遺蹟」『考古歴史学志』一七・一八合輯、二〇〇二年）。駅の痕跡が確認されたわけではありませんが、その近くの道路だろうと思われるものが見つかっているのです。『三国史記』新羅本紀六・文武王八年（六六八）一〇月二五日条には、高句麗討滅の戦いから凱旋して帰る途中の王が、褥突驛に泊まったことを記しています。賈耽（七三〇〜八〇五）という唐の大臣が作った『古今郡国志』（『古今郡国県道四夷述』）には、

渤海国の南海・鴨渌・扶餘・柵城の四府、並びに是れ高句麗の舊地なり。新羅の泉井郡より柵城府に至るまで凡そ三十九驛なり、と。

とあります。渤海国の四つの府、特に柵城府と、新羅の郡とを結ぶ駅路があつたということです。この新羅の泉井郡は、新羅の一番東北の端ですから、三九驛といつても、ほとんど渤海側になります。泉井郡は新羅領土ですが、むしろ渤海側の驛道となります。しかし、新羅国においては、泉井郡まで駅路で結ばれていたことは十分に考えることができますので、つまりは新羅の都から渤海に至るまで駅路が通じていたということになります。もちろん互いに独立した国ですから、同じ指揮命令系統に従っているわけではないので、互いの国境あたりまで両方の駅路がつながっていて、それがさらにつながっていることが考えられるということです。

以上見てきたように、新羅においても、駅の存在を伺うことができる材料があるわけですが、ようやく駅の名前がわかるという程度でしかありませんが、当然、駅制を前提にしたものということができます。もう一つだけ、性格の変った五つの駅について述べておきます。

五つの門駅です。どういうものかといいますと、『三国史記』の地理志四に「三国有名未詳地分」という見出しがつけられた地名群があります。『三国史記』を書いた人が参考にしたもの資料に、名前は残されているけれども、どこかわからないという、名はあるが未詳であるものを集めたものです。そのような地名が羅列されているだけです。四五〇くらいあります。その中の八三番目から八七番目まで、乾門駅・坤門駅・坎門駅・艮門駅・兌門駅というように方位を意味する漢字に門駅をつけたものがならんでいます。方位は坎・艮・震・巽・坤・兌・乾と八方向の文字があるわけですが、あげられているのは五つだけです。もともと五つで完結するものなのか、八つあつたけれども残っていないのかわかりません。いまは、この五つを通して考えるしかありません。この五つの門駅が、都から出発するときの最初の駅で、そこが門になる、そういう駅を並べたものであると最初に指摘したのは井上秀雄先生です（『新羅史基礎研究』東出版寧楽社、一九七四年）。わたしは井上秀雄の弟子で、先生が東北大学に行かれる前に龍谷にも非常勤講師としていられていました。四〇年も前の話ですが、井上先生がそういう点に着眼された、そのことはすばらしいと思います。しかし先生の結論については異議があります。というのは、方位がついている門駅ですので、方位にあわせて形で理解すべきなのに合っていないと思います。乾門駅は西北の方向でないといけないのですが、西南の義谷駅にあてる。坤門駅は西南でないといけないのですが、東南の毛火にあてる。坎門駅は北ですが、西北の阿火駅にあてる。兌門駅は、西でないといけないのに南の咽薄にあてる。というように、なぜ方位を書いているのに、あわない方で考えるのかということがよく理解できません。街道の問題とかかわらせて、そのようにずれた解釈になったのかもしれないのですが、それはおかしいと思うのです。

先にもとりあげた『大東輿地図』ですが、慶州を中心にして道路が四方八方に延びています。ただしそれは一九世紀の道路網です。さかのぼらせる方法がないか考えてみました。その道路上に、高麗時代の駅をのせることができますものを調べると、いくつか残ります。その道路に限定して方位を考慮すると、乾門駅（西北）は西北の阿火駅付近、坤門駅（西南）は西南の義谷駅付近、坎門駅（北）は北の安康駅付近、艮門駅（東北）は東北の北兄山または祇林寺の附近、兌門駅（西）は西の牟良駅付近にあてることができます。新羅時代にそのままの名の駅があつたとかいうわけではありませんが、各方向における慶州から最初がそれであり、位置的にはそのあたりと見ることができるとは思いません。

す。そして、これが起点となって、地方に向けて幹線道路が延びていたと考えられます。

さきの「三国有名未詳地分」には、七二番目から七六番目にかけて、北海道・塩池通・東海通・海南通・北條通という五つの通が並んでいます。これを五つの門駅につないで、地方に向かう五大街道を意味すると考えたのも井上秀雄先生でした。先の門駅の理解とともに、この点も非常に重要な指摘です。なぜ通という、道路としてはあまりなじみのない文字を使っているのかというと、道というのは新羅においても唐においても行政区分として用いられていました。それと混同されるといけないので道は使わず、通としたのだろうという考えです。その通りでいいと思いますが、五通が具体的にどこなのか、井上先生が提示されています。整理すれば、次のようになります。

北海道 良門駅↓悉直↓何瑟羅↓達忽↓比列忽 (溟州街道)

塩池通 坎門駅↓骨火↓召文↓古隋耶↓奈己↓竹嶺↓国原↓北原↓牛首↓漢山

東海通 坤門駅↓屈阿火↓居柴山↓金海↓阿耶加羅↓康

州 (旧任那街道)

海南通 兌門駅↓歛良↓比斯伐↓大耶↓居烈↓南原↓武

珍↓発羅 (武州街道)

北條通 乾門駅↓押督↓達句火↓本彼↓甘文↓一善↓沙

伐↓西原↓熊川↓湯井↓唐恩 (旧百濟街道)

それを図で示したものが、図6のものとの図です。図6は、

その上に、わたしの考えにもとづく目的地を加筆しています。井上先生の考えに対して、わたしは異見をもっているのですが、それについて少し述べたいと思います。まず北海、東海、海南は、海を含み方位も書かれています。井上先生は北海道について、東北方面に北上するルートを考えています。

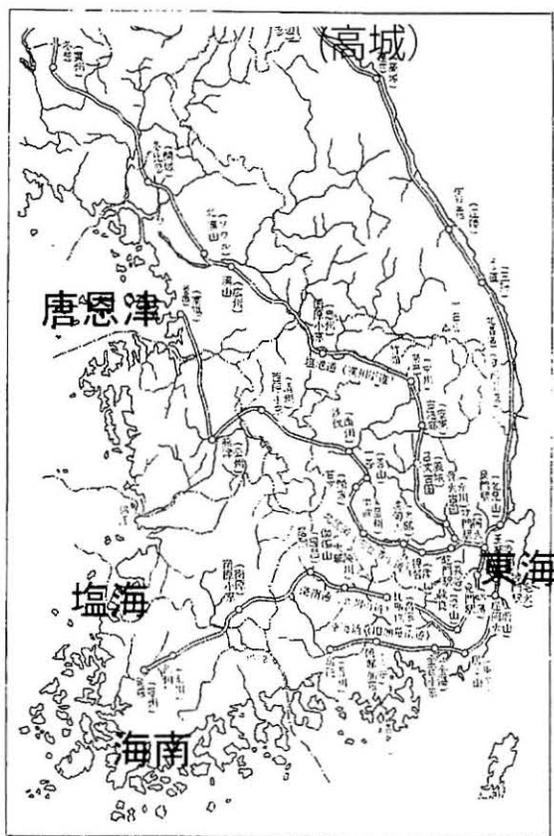


図6 井上秀雄説「五通」に加筆

結論的にはそれでいいと思いますが、何の根拠もなく、そういわれているのが問題です。

『三国遺事』巻一・奈勿王金堤上条には、

〔訥祇王〕十年乙丑（四二五）……堤上、簾前に命を受け、徑ちに北海の路に趨き、服を変えて句麗に入り、宝海の所に進み、共に逸期を謀る。先に五月十五日を以て帰して高城水口に泊りて期日を待つ。將に至らんとするや、宝海病と称し、数日朝せず。乃ち夜中に遊出し、行きて高城の海浜に到る。王、之を知り、数十人をして之を追わしむ。高城に至りて之に及ぶ。然れども宝海、句麗に在りて常に恩を左右に施せり。故に其の軍士、之を憫傷し、皆な箭鏃を抜いて之を射ゆ。遂に免れて帰る。

という記事があり、「北海の路」が登場します。「北海通」を考える時に、この資料は避けて通れないと思います。堤上という人物が王の命を受けて高句麗で人質になっている王子を救いだしにいく時の記録ですが、その王子を救い出す時、高城の海浜に至るとあります。現在、韓国の北端が高城あたりです。そこを通過してということも書いています。時代は異なりますが、「北海」ということばを考える上で、この史料は不可欠であるといえます。そしてそれをもとに、北海通は、東海岸近くを北上する道であるということができるところです。

「東海通」について、井上先生は、慶州王宮から日本海に出るには北海通を除くと蔚山への大道しかない、ということでもまず蔚山（屈阿火）方面に出て行く道を考えています。しかし東海というのは、新羅の王権にとって重要なところでして、文武王という三国統一を達成した王が遺言で葬られたとされているところが東海口といわれています。伝説では大きい石の上に葬ると出てきます。その大きい石は、現在、大王岩と呼ばれ、文武王の海中王陵として知られています。その近くに感恩寺というお寺があります。この寺は文武王の子である神文王が、父親のあとをうけて造営したものです。文武王の遺言によれば、死んだあとに護国の龍になって国を護るといつていたといっています。神文王は、龍になった父が戻ってこられる施設として造っています。塔が二つあり、金堂と講堂が南北にならぶ伽藍ですが、金堂は特異な施設で、礎石の下に空間をつくっています。たいへん不安定な構造です（国立博物館特別調査報告第二冊「感恩寺」乙酉文化社、一九六一年）。それは龍になった父が入ってこられるようにしているのであり、穴もあけられています。大王岩は、そこから見えるところにあります。岩礁の真ん中に柩の蓋のような岩があり、そこを海中王陵と呼んできました。実際は海中王陵ではないと考えるべきで、伝承にすぎません。国立慶州文化財研究所が調査をして、自然の岩でしかないといっていますが（文武大王水中陵精密実測調査および物理探査）『国立慶州文化財研究所年報』一一号、二〇〇一年）、

実は文武王には陵碑が残されています。それが発見されたのは、大王岩からは遠く離れた慶州市内です。その近くに王陵があったと考えなければなりません。従いまして、ここに王陵があったというわけではないのですが、しかし文武王は火葬した最初の王で、ここ東海に散骨したことは別に問題がないと思います。そういうところと感恩寺の存在から、このあたりが新羅の王室にとって聖なる地であることはまちがいありません。とすれば、「東海」と使われているのは、そうした新羅にとって重要な場所である東海口と関わらせて考えるのが自然なことではないかと思えます。その場合、都からすぐ東側に東海があるので、非常に短い距離になってしましますが、それとは関係なく、重要な通路であるといえますので、その通路こそ「東海通」と考えるべきだと思ふのです。

「海南通」については、「南海」という地名が新羅の時代に存在していました。北海と東海ですから、南海でもいいはずなのに「海南」としてあるのがなぜか、と考える必要があります。わたしは、現実に存在する南海に向かう道ではないとすることをいっているのではないかと考えます。「海南」とは、一般的には海の南ですが、高麗時代に「海南県」が存在しました。新羅時代には「海南」という地名はなかったのですが、現在も「海南」と呼んでいるところが全羅南道にあります。わざわざ海南とするのは、南海ではなく、こちらに向かうということだったのでないか、それがもたなくなって「海南」という地名がつけられることになったと考えてはどうかと思っています。

次に「塩地通」ですが、井上先生は中国に渤海塩池が知られており、その中国の河北省の塩池をめざす道だとされます。しかし新羅時代において、「塩」という文字を含んだ地名が存在します。それは新羅九州のなかの武州の庄海郡の「塩海県」です。調べてみれば、後代の記録ですが、このあたりでは塩がとれたということがわかります。新羅時代に馬の牧場が西海岸に近い島にあったことが知られています。馬と塩はつきものと言いますが、ただ人間が塩をもつと必要としていて、牧場があることと塩の需要が高いことは必ずしも結びつかないことですが、関わりないのかどうか。それはさておいて、新羅の街道として、新羅のなかの塩地があれば、そこに向かう道を塩地通と言ったとみるのもおかしくはないと思います。

最後に「北徭通」ですが、井上先生は、中国に対しての徭役という意味として考えています。それで、新羅から唐に行くときの港、唐恩浦と言っておりましたが、そこへのルートを想定されています。わたしもそれではないかと思えます。

このように考えて、さきの五つの門駅とを結びあわせると、五つの街道ができあがることとなります。ただし以上みてきたのは目的的にすぎ

ず、途中はまったくわかりません。それを考えるための史料がありません。『三国史記』地理志一にみえる尚州の説明に「王城の東北、唐恩浦路に当たるを尚州と曰う」とあります。「東北」は「西北」の誤りと考えられますが、唐恩浦にいたるルートは、尚州を通ることがわかる。そのルートを「北僑通」と呼んでいないことは気になりますが、問題はないでしょう。井上先生の五通推定図に、わたしの考える目的地を加えて、図6に示します（五門駅・五通についてのわたしの考えは、田中「新羅の交通体系に対する予備的考察」『朝鮮古代研究』四号、二〇〇三年で述べたことをもとにしています）。

以上のように、新羅には、五通と呼ばれる五大街道があり、それは都の京都駅（都亭駅）を出発点として、北には活里駅をはさんですが、五つの門駅から五つの方向に大きな駅路が延びていたと考えられます。もちろん、五大街道しかなかったわけではなく、それ以外の駅路、さらには駅路とは異なる道路も発達していたことでしょう。

そうであれば、そうした五通なり駅路、あるいはそれ以外の道路に沿って、宿泊施設もあつたと考える必要があります。その場合、寺院でそのような機能を果たしていたものもあつたと考えられます。新羅人は唐において寺院がそのような役割を果たしていたことを知っているわけですし、実際に唐において造つてもいます。

唐における寺院の宿泊機能に関連して、最初に取り上げた那波先生の論文のなかで、巡礼がそうした機能と関わるということを述べておられます。もともと江原道の襄陽の沙林寺址にあつた「沙林寺弘覚禪師碑」（八八六年）は、現在中央博物館に移されていますが、その中に禪師が「聖跡名山嶺を逍遙とし周く巡礼」しようとしたことを記しています。新羅人もまた、巡礼ということがあつたものと思われれます。ただし、唐の場合でも、円仁が天台山をめざして実現しなかったり、五台山へ行くために通行許可証（公驗）が必要であつたように、自由に往來することはできなかつたと思いますが、新羅の場合は、よりいっそう困難であつたのではないかと思えます。新羅には厳格な身分制があつて、都の人間と地方の間は大きく差別されてきました。僧侶だけは地方の僧侶が都に入ることもできる、その場合には移住もあります。従いまして、だれでも自由に巡礼ができたとは思えませんが、しかし移動することが皆無であつたわけではありません。むしろそういう条件のなかで、宿泊機能をもつ寺院が有用であつたと想像することができます。

聞慶にある鳳巖寺は通常、參觀することができないのですが、そこにある「鳳巖寺智證大師塔碑銘」（九二四年）には智證大師が「太傳大王

（憲康王）の招きを受けて王都慶州の月池宮に行くことを記しており、その途中に禪院寺に「信宿」したとあります。つまり二泊したということです。そのほかもうひとつ、関わりがありそうな例としてあげれば、『三国遺事』卷二・万波息笛条には、

明年壬午（六八二）五月朔【一本に天授元年と云うは誤りなり】海官波玳喰（滄）朴夙清奏して曰わく、「東海中に小山有り、浮びて來たり感恩寺に向う。波に隨いて往來す」と。王之を異とし、日官金春質【一に春日に作る】に命じ之を占わしめて曰わく、「聖考、今海龍と爲り、三韓を鎮護す。抑も又た金公庚信乃ち三十三天の一子にして、今降りて大臣と爲る。二聖徳を同じくし出でて城の寶を守らんと欲す。若し陛下海过（邊）に行幸せば、必ず無價の大寶を得ん」と。王喜んで其の月の七日を以て、駕もて利見臺に幸じ、其の山を望む。使を遣わし之を審らにせしむるに、山の勢龜頭の如く、上に一竿竹有り、晝に二と爲り、夜に一に合す【一に云う、山も亦た晝夜開合すること竹の如し、と】使來たりて之を奏す。王感恩寺に御して宿る。明日午時、竹合して一と爲る。天地振動し風雨晦暗たること七日。其の月十六日に至り風霽れ波平らかなり。王、海に及び其の山に入る。龍有り、黒の玉帶を奉じ來たり獻ず。迎接して共に坐せしめ問うて曰わく、「此の山と竹、或いは判じ或いは合するは如何」と。龍曰わく、「比ぶるに、一手もて之を拍つに聲無く、二手もて拍たば則ち聲有るが如し。此の竹の物爲るや之を合し然る後に聲有り。聖王聲を以て天下を理むるの瑞なり。王、此の竹を取りて笛を作り之を吹かば、天下和平たらん。今王考海中大龍と爲り、庚信復た天神と爲れり。二聖心を同じくして此の無價の大寶を出だし、我をして之を獻ぜしむ。」と。王、驚喜して五色錦彩金玉を以て之に酬賽す。勅して竹を斫らしむ。海に出でし時、山と龍忽ち隠れて現われず。王、感恩寺に宿ること十七日。祇林寺の西の溪邊に到り、駕を留めて晝齋す。太子理恭【即ち孝昭大王なり】闕を守り、此の事を聞き馬を走らせ來たりて賀す。徐察奏して曰わく、此の玉帶の諸窠、皆な眞龍なり、と。王曰わく、汝何ぞ之を知れるや、と。太子曰わく、一窠を摘りて水に沈めて之を示せ、と。乃ち左邊の第二窠を摘り溪に沈めるや、即ち龍と成りて上天す。其の地、淵を成す。因りて龍淵と號す。駕還（還）り、其の竹を以て笛を作り、月城の天尊庫に藏す。此の笛を吹けば則ち兵退き、病愈ゆ。早に雨ふり雨には晴れ、風定まり波平らかなり。萬波息笛と號す。稱えて國の寶と爲す。孝昭大王代天授四年癸巳（六九三）に至り失禮郎生还（還）せるの異に因りて更に號を封じて萬萬波波息笛と曰う。

という伝承的な内容を伝えています。先に東海通について述べましたが、王（神文王）が、その東海にある感恩寺で一七日間泊まり、途中に現在もある祇林寺（史料では祇林寺となっていますが、おそらくともと祇林寺だったのだと思います）で昼食をとっています。これは、王によ

る特別な場合、ということも言えますが、行宮としてではなく、寺にそのような施設があったものと考えられます。

唐に渡って学んだ僧は多いのですが、時代が降ると、西南地域、全羅道地方ですが、そちらから往復するケースが増えます。すぐに都に戻るというわけではありませんが、そのようなルートを通じて都に戻る場合にも、お寺に宿泊しながら、ということが想像できます。

以上、掲げたタイトルは、羊頭狗肉と言ってよい内容になってしまい、副題の方の「新羅の交通体系」を中心に話したことになりました。そうした限られた史料条件の中で、今後、あつたはずだと考えられる新羅の寺院の宿泊機能について考えていきたいと思っております。それではここまででさせていただきます。どうもありがとうございました。

図の出典は次の通りです。

図1 赤山法華院（山東省文登市）現状全景 田中撮影

図2 『奉先弘慶寺碑碣』 田中撮影

図3 弥勒里寺址発掘平面図 張俊植ほか『中原弥勒里寺址総合整備基本計画』（忠州市・忠清大学校博物館、二〇一一年）挿図に加筆

図4 慶州旧駅マウルの位置 大正五年陸地測量図測図一万分の一地図「慶州」に加筆

図5 『仁陽寺塔金堂治成文』裏面 田中撮影

図6 井上秀雄説「五通」に加筆 井上秀雄『新羅史基礎研究』（東出版寧楽社、一九七四年）挿図に加筆

【司会】 どうもありがとうございました。講演会はこれで閉じさせていただきましたと思います。田中先生、ありがとうございました。本日はご参集いただきましてみなさま、ありがとうございました。

以上